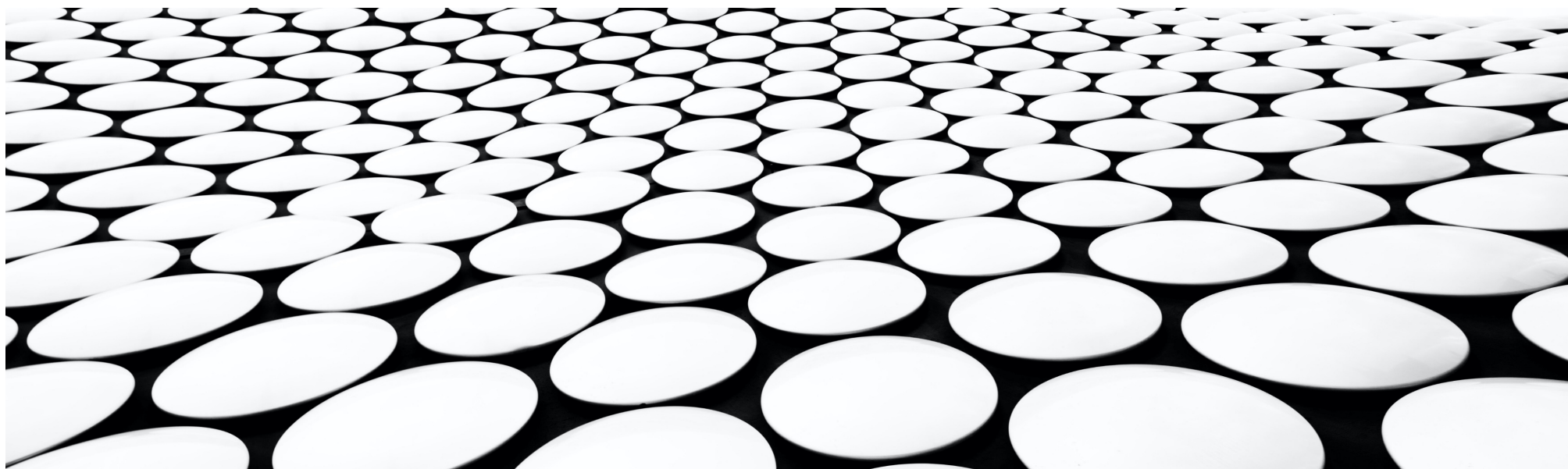

CHOOSE大学

公共性とは何か？

第1回 メディアと公共性

田中東子



CHOOSE大学 6月の講義内容

- 【第1回】メディアと公共性
- 【第2回】ソーシャル・メディアと公共性
- 【第3回】スポーツと公共性
- 【第4回】サブカルチャーと公共性

★自己紹介★

【経歴】

- 1972年横浜市生まれ
- 政治学博士（早稲田大学大学院政治学研究科）
- 2011年：十文字学園女子大学人間生活学部専任講師
- 2013年：十文字学園女子大学人間生活学部准教授
- 2015年：大妻女子大学文学部准教授
- 2017年：東京大学大学院情報学府客員准教授
- 2019年：大妻女子大学文学部教授および
東京大学大学院情報学府客員教授

【専門分野】

メディア文化論、カルチュラル・スタディーズ、
第三波以降のフェミニズム

【主著・編著・訳書】

『メディア文化とジェンダーの政治学—第三波フェミニズムの視点から』（単著, 2012）、『ユニオン・ジャックに黒はない』（訳書, 2017）、『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』（編著, 2017）、『私たちの「戦う姫、働く少女」』（共著, 2019）、『足をどかしてくれませんか』（共著, 2019）、『ガールズ・メディア・スタディーズ』（編著, 2021）

良かったら、ぜひお手に取ってみてください！



第1回 メディアと公共性

目次

- 1. メディアの公共性とは何か？
- 2. ハーバーマースと公共圏
- 3. オンライン・メディアと市民参加

1. メディアの公共性とは何か？



1 - 1 従来型メディアにおける「公共性」

■「公共性」とは？

- 広く一般の人々、社会に開かれていること、知られていること、利益になること

公共性 ⇔ プライベート

公共性 ⇔ 商業主義

■ メディアと「公共性」

- 印刷メディアの公共性：

文化の形成と維持、「想像の共同体」の形成と維持

- 放送メディアの公共性：

限られた電波を利用する放送は重要な「資源」であり、社会全体の利益に適うように用いられる。限られた数のチャンネルや番組をそれぞれの国民が視聴するため、全国民の間に共有された文化的経験がもたらされる。

ベネディクト・アンダーソン 『想像の共同体— ナショナリズムの起源と 流行』



ナショナリズム研究の今や新古典。
増補版(1991年)にさらに書き下し新稿
「旅と交通」を加えた待望の
New Edition(2006年)。翻訳完成!

- 大量の出版技術と資本主義の発展が、国家のすみずみにまで書物を行きわたらせ、読み書き能力を通じてそれぞれの国家全体で同じアジェンダや同じ関心を抱くことを可能にさせた。
- メディアによって引き起こされたつながりや一体感を「想像の共同体」と呼ぶ。

■「公共性」は「際限のない自由」ではない

- 権力からの独立性を保ちつつある程度の規制と管理
- 使用できる周波数の割り当て

■ 規制やコントロールに関する二つの思想

- **保守主義**：社会を統制する必要性、国民意識の醸成
- **社民主義**：社会の啓蒙、市民のエンパワメント

1 - 2 メディアの民主主義的役割

■ メディアはどのような役割を果たしてきたのか？（カラン 1995, 131-162）

- 伝統的には
 - a)「国家を監視する番犬」
 - b)「消費者の代表」
 - c)「正確な情報の提供者」
 - d)「公正中立なジャーナリズム」

■ 公共放送の8原則（マイケル・トレシー）

- ①教育 ②情報の提供
- ③国民の一体感の育成 ④マイノリティへの対応
- ⑤質の高い番組制作
- ⑥（企業や政府からの）独立性
- ⑦民衆の参加 ⑧社会の向上

■ 娯楽の空間としてのメディアの役割

- 「公共サービス」VS「商業娯楽」

⇒今日では「公共サービス」よりも、「消費者の楽しみ」や「企業の利益」が優先に

⇒「公共放送」の衰退と、衛星放送やケーブルテレビによる多チャンネル化

■ メディアと「公共性」に関する議論

- 「参加」のアクターが制限されていた時代の産物

新聞

ラジオテレビ

オンライン・
メディア

- メディア技術史は、参加者の爆発的な拡大の歴史でもある

-
- 現在は、誰もがメディアの言論空間に参加できるようになったオンライン・メディアの時代
 - これまでの「公共性」の議論の有効性を問い直し、必要に応じて再構築していかなければならないのではないか？

■「公共性」に参加するアクターの偏り

- 従来型メディアによって形成・維持されてきた「公共性」は、「ある特定の階層のシスジェンダー・ヘテロセクシュアル男性」の視点や思考を規範としてきた。

⇒本当にあらゆる市民が「参加」できていたのか？

⇒誰にとっての「質の高さ」や「社会の向上」であったのか？

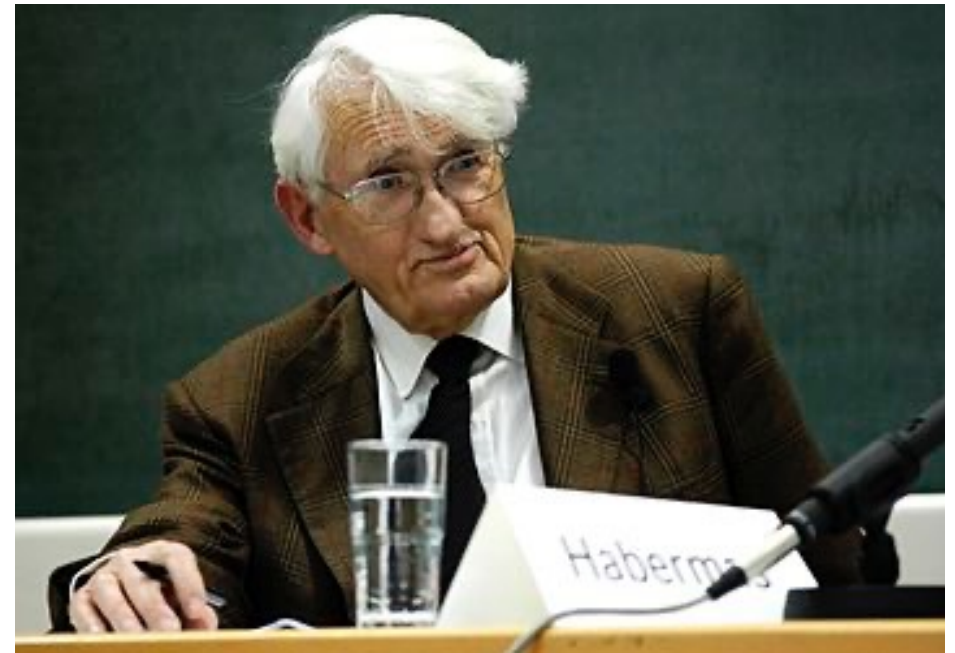
2. ハーバースマスと公共圏



2 - 1 ユルゲン・ハーバーマスの公共圏

■ Jürgen Habermas
(1929 -)

ドイツの現代思想家、フランクフルト学派第二世代、公共圏論やコミュニケーション論を展開



■「公共圏」とは

- 【理想論】18世紀～19世紀初頭のヨーロッパにおけるブルジョワジーの公共圏
- ハーバーマスにとっての「公共圏」とは、「公共善に影響を与える重要な情報へのアクセスが広範にわたって利用可能であり、そこでの議論が国家の支配から自由で、公的討論に参加するすべての人々が平等な立場であるような中立的なゾーン」（カラ
ン1995, 131）

⇒「すべての人」とあるが、ここで想定される市民像は実際の市民たちとは乖離しているのでは？

-
- 【現実】「高度に分化し組織化された資本主義社会における大衆政治の時代の、かつてそこから排除されていたような人々の参加を可能にするための公共圏の拡張」(ibid.)

⇒つまり多様性の確保であり、18～19世紀には想定されていなかった多様な人々による参入が起こる／必要となっている。

⇒とはいえ、「多様性がオルタナティブへの自覚に根差した理性的討論を促すもの」であるかどうかは、検討されるべき課題である。

2 - 2 ハーバーマスの「公共圏」批判

■ハーバーマスの想定する理想的な「公共圏」への批判

ハーバーマスの「公共圏」は私たちの目指すべき理想かもしれないが、

- 「ブルジョワ的公共圏」にすぎず、社会に開かれているという「公共性」の原則に抵触するのではないか？
- 女性や有色人種、「正常化」の規範から外れる多くの人々を排除してしまうのではないか？
- 社会の変化や新しいメディア技術の登場によって拡大され大衆化が進む新しい時代の「公共空間」を捉えきれないのではないか？

3 オンライン・メディアと市民参加



3 – 1 オンライン・メディアによる変化

■ オンライン・メディアのコミュニケーションとは

- 「プライベートな送信とプライベートな受信」が「公共空間」にあふれ出て双方向的にコミュニケーションを行っている状態

cf: 従来型のメディア = 「パブリックな送信とプライベートな受信」が「公共空間」に一方向的に
広く流される (broad/casting) 状態

- 従来型メディア：

メディアの「送り手」がある特定の人々に制限されていた



- オンライン・メディア：

あらゆる人々が「メディア」そのものとして公共の空間で発言や表現活動を行えるように複数の公共圏がネットワークで結び付けられ、インタラクティブに情報を伝達しあい、共有しあうようになりつつある

-
- ここで重要なのは、「従来型メディア」の影響力が一掃され、「オンライン・メディア」による参加の空間に置き換えられてしまった、というように考えてはならないということ。
 - 従来型メディアとオンライン・メディアは並列し、相互参照的に存在している。

【楽観論】

双方向性に基づきあらゆる人々が簡単に参加することのできるようになったインターネットなどのコミュニケーション技術によって、一般の人々は政治に関心をもち、社会の課題に関与し、理性的な議論に参加し、ハーバーマスの理想とした「公共圏」を構築できるようになるのではないか？

【悲観論】

インターネットの脱中央集権的な構造があるにもかかわらず、GAFAなどの巨大コミュニケーション産業によってこれらの技術は支配・監視されている。一市民の生産・制作するメッセージなど、いくつかのレアケースを除けばごく一部の人々の目にしか触れないのであり、既存の社会における権力関係や差別の構造はオンライン・メディアにおいても維持されたままである。

実際にはどうなのでしょう？

👉 次回予告「ソーシャル・メディアと公共性」

ご清聴ありがとうございました！

■ 参考文献

- アンダーソン、ベネディクト（1997）『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行〔増補版〕』白石さや＋白石隆訳、N T T 出版
- カラン、ジェームズ＋グレヴィッチ、マイケル（1995）『マスメディアと社会』勁草書房
- クドリー、ニック（2018）『メディア、社会・世界—デジタル・メディアと社会理論』山腰修三監訳、慶應義塾大学出版会
- ハーバーマス、ユルゲン（1992）『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求〔第2版〕』細谷貞雄＋山田正行訳、未来社
- ホドキンソン、ポール（2016）『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』土屋武久訳、ミネルヴァ書房